

論 文

女子大学生における恋愛関係とセルフ・モニタリング傾向

諸 井 克 英

生活科学部・人間生活学科

I. 問 題

Snyder (1979) は、人には自分の行動の社会的適切さに対する関心から他者の行動に敏感になり、自分の行動を統制する一連の心理学的過程が存在することを指摘し、この過程をセルフ・モニタリングと呼んだ。同時に、彼は、この過程上の個人差を測定するセルフ・モニタリング尺度 (Snyder, 1974) を開発し、この尺度を活用しながら、セルフ・モニタリング理論の構築を目指した。

セルフ・モニタリング概念は、自己理論や対人関係の枠組みにも関連づけられた。つまり、セルフ・モニタリング傾向に富む者 (以下、高 SM 者と略す) は自分の日常世界を状況に応じて都合よく分節化するが、セルフ・モニタリング傾向に乏しい者 (低 SM 者) は内面性によって結合した人々から成る同質化した日常世界を構成する (Snyder, 1986; 八城・小口, 2003)。これは、恋愛関係にまで拡大され、たとえば、高 SM 者が、①交際の開始段階において相手の容姿を重視する、②交際期間が短期で交際した異性の数が多い、③性経験が豊富である、などの特徴的な傾向を示すことが報告されている (Snyder, 1986)。

わが国でもいち早く、水野 (1991) が恋愛状況における高 SM 者の外見性重視傾向を見出した。彼は、写真の「ハンサムさ」と架空のプロフィールを組み合わせ、「ハンサムだが性格の悪い男性」と「ハンサムではないが性格のよい男性」の2枚の写真を女子大学生に呈示し、ボーイフレンドとしてどちらかを選択させた。高 SM 者はハンサムだが性格の悪い男性写真を、低 SM 者はハンサムではないが性格のよい写真を選択する傾向があった。

また、女子高校生を対象として友だちとの関係水準との関連を調べた遠矢 (2003) によると、高 SM 者が友だち関係の維持に親密性深化ストラテジー (「相手の情報収集

と共有」、「積極的働きかけ」と親密性抑制ストラテジー (「接触回避」、「共有事項の回避」、「表面的関与」) の両面を活性化させていた。

しかしながら、高 SM 者の状況的適応性という側面に一致しない知見も提出されている。水野・橋本 (1993) は、男女大学生の高 SM 者が対人ストレス感が高く、恋愛対象に強い恋愛感情を抱く傾向にあることを認めた。また、新明・清板 (2005) の研究では、友だち関係に対して、高 SM 者が「楽しさ」や「円滑さ維持」を志向する反面、「内面的関わり」を志向していた。男女大学生の携帯電話機の利用と影響に関する意識を検討した八城 (2007) も「自己呈示変容能力」(後述する Lennox & Wolfe (1984) による尺度の一側面) が携帯電話機によって対人関係の親密化がはかられるという意識を促進することを見出した。

このように、もともと Snyder が概念化した高 SM 者の対人関係の営みに関する考え、つまり状況に応じて構成される分節化された日常世界を構成しているという特徴は必ずしも支持されていない。

ところで、筆者による先行研究 (諸井, 2003) では、高 SM 者が自分がおかれている状況を把握しながら自分の行動を決定するという前提から、「セルフ・モニタリング傾向に富む者は、親密化の後期段階で恋愛感情の高まりが現れる。」と仮定した。しかし、男女大学生を対象とした調査は、これとは逆の傾向を示した。つまり、「自己呈示変容能力」(Lennox & Wolfe, 1984) が高い者は、低い者に比べて、交際の早い時期に恋愛感情の高まりを見せた。

本研究では、調査時点での「恋人」あるいは「親しい異性」との関係進展にセルフ・モニタリング傾向がはたす役割を検討した。また、時間的展望の観点を含め、回答者の恋愛についての態度や行動上の特徴を尋ね、これらとセルフ・モニタリング傾向との関連を調べた。セルフ・モニタリング傾向の高低による対人的な日常世界の構成上の差異に関する先述した Snyder の考え (分節化した世界対同質化した世界) に基づき、以下の仮説を提起した。

仮説 I: 高 SM 者は、低 SM 者に比べて、恋愛相手の外

見上の特徴を重視するだろう。

仮説Ⅱ：高SM者は、低SM者に比べて、恋愛相手と排他的な関係を形成することに積極的でないだろう。

仮説Ⅰについては、恋愛関係において相手の内面性を重視することはコストを伴うからである。先行研究（諸井，2003）でも仮定したように、相手の内面性に関する情報は出会いの初期には入手されにくく、そもそも曖昧であり、関係の進展の中で得られる。そのため、高SM者は相手の内面性よりも明確な情報である外見性を重視すると予測される。

仮説Ⅱは、仮説Ⅰから導かれる。相手の内面性の重視は相手との親密な関係の確立につながる。しかし、相手への没入は相手との関係に拘束されることとなり、状況変化に対応できない。そのため、高SM者は、本来は恋愛関係の特徴でもある関係の排他性（増田，1994）を回避する方向で行動するはずである。

ところで、Lewin（1951）は、現時点での心理的状态が「希望や願望」や「自分の過去の見解」に影響されることを指摘し、「ある与えられた時に存在する個人の心理学的未来及び心理学的過去の見解の総体」を時間的展望と定義した。本研究では、この時間的展望の観点を取り入れ、回答者に自分自身の恋愛態度や行動を尋ねる際に、「過去」、「現在」、および「未来」の3つの基準を設けた。時間的展望に関する仮説は特に立てなかったが、①恋愛態度や行動の構成要素についての時間的比較（共通性と差異）、②セルフ・モニタリングの関わりでの時間的比較を行った。

以上の研究目的のために、女子大学生を対象に質問紙調査を実施した。

Ⅱ. 方 法

調査対象および調査の実施

同志社女子大学で「社会心理学」関係の講義を受講している女子学生を対象に、『異性に対する意識と行動』の項目で質問紙調査を実施した（2005年5月）。回答にあたっては匿名性を保証した。青年期の範囲を明らかに逸脱している者（25歳以上）を除き、後述する一連の質問紙に完全に回答した者264名を分析対象とした。回答者の平均年齢は18.50歳（ $SD=.81$; 18-21歳）であった。

質問紙の構成

質問紙は、①改訂セルフ・モニタリング尺度、②被験者の基本的属性、③恋愛態度・行動尺度から構成されている。

1. 改訂セルフ・モニタリング尺度

セルフ・モニタリング傾向における個人差を測定するために、Lennox & Wolfe（1984）によって作成された改訂セルフ・モニタリング尺度を用いた。諸井（1995, 1997, 2003）は、Lennox & Wolfeによる改訂尺度の日本語版を作成し、高校生や大学生に実施した。彼らの結果と一致して「自己呈示変容能力」と「他者の表出行動に対する敏感さ」の2下位尺度を得た。Lennox & Wolfeによるこの尺度の2因子性は、他の研究によっても確認されている（堀毛，1987; 石原・水野，1992; 八城・小口，2003; 八城，2007; 藤岡・高橋，2008）。

本研究では、諸井による日本語版（Table 1参照）を用い、被験者のセルフ・モニタリング傾向の2側面を測定することにした。13項目それぞれについて、「この6カ月間の自分の状態にあてはまるかどうか」を、4点尺度で評定させた（「4. かなりあてはまる」～「1. ほとんどあてはまらない」）。セルフ・モニタリング傾向が強いほど高得点になるようにした。なお、評定順の効果を相殺するために、項目順の異なる2通りの質問紙を用意した。

2. 恋愛態度・行動尺度

セルフ・モニタリング傾向と恋愛関係との関連を見るために、恋愛態度・行動尺度を独自に作成した。Snyder（1986）の研究知見や指摘に基づいて、セルフ・モニタリング傾向に関連した恋愛態度や行動上の特徴を挙げ、26項目に整理した（Table 2-a, b, c参照）。

本研究では、これら26項目について、「過去」、「現在」、「未来」の観点から回答者の恋愛態度や行動を尋ねた。「過去」では回答者の過去の恋愛経験について、「現在」では回答者が現時点で恋愛について抱いている考えや気持ちを、「未来」では今後もしかかもしれない考えや予測される行動を、それぞれ評定させた。各項目に対して、4点尺度で評定させた（「4. かなりあてはまる」～「1. ほとんどあてはまらない」）。

なお、評定順の効果を相殺するために、次のように工夫した。まず、「過去」、「現在」、および「未来」の各尺度それぞれで項目配列の異なる2通りの質問紙を用いた。さらに、「過去」、「現在」、および「未来」の評定順は、回答者によって無作為に異なるようにした。

Ⅲ. 結 果

各尺度の検討

本研究で用いた尺度の項目水準での検討を行った。まず、

Table 1 改訂セルフ・モニタリング尺度に関する主成分分析（プロマックス回転〈 $k=3$ 〉）の結果: 回転後の負荷量

	I	II
〔他者の表出行動に対する敏感さ〕		
sm_a_4 話をしているときには、相手の表情のわずかな変化にも敏感になる。	.719	-.240
sm_a_2 目をみれば、その人のほんとうの気持ちを正確に読み取ることができる。	.717	.102
sm_b_4 だれかが自分にうそをついても、表情やしぐさですぐにうそだと見抜くことができる。	.656	.058
sm_b_1 目をみれば、自分が相手に何か不都合なことを言ったかどうか分かる。	.634	.033
sm_a_6 相手が冗談を聴いて笑っても、内心ではその冗談を下品であると思っているかどうかを見抜くことができる。	.633	-.032
sm_a_5 私の直感力は、相手の気持ちや行いの原因を知るのにとっても役に立つ。	.619	.058
〔自己呈示変容能力〕		
sm_b_2 相手や状況に応じて自分の行動を変えるのが苦手である。	.068	-.686
sm_b_6 その場面でどのようにふるまえばよいか分かれば、それに応じて、自分の行動をたやすく変えることができる。	.116	.678
sm_b_3 自分が今いる場面で必要とされていることに応じて、自分の行動を変えることができる。	.178	.632
sm_a_7 物事が自分の思い通りにうまくいかないときには、すぐに他のやり方に切り換えることができる。	-.030	.585
sm_b_5 自分のためになると分かっているにもかかわらず、体裁をよくするのが苦手である。	.247	-.581
sm_a_1 まわりの人が望んでいることに応じて、自分の行動を変えることができる。	-.023	.551
sm_a_3 相手にどのような印象でも与えることができる。	.216	.497
〔主成分間相関〕	I	.285

N=264

初期固有値 ≥ 1.903 ; 初期説明率42.10%

項目平均値の偏り ($1.5 < m < 3.5$) と標準偏差値 ($SD > .60$) のチェックをし、不適切な項目を除去した。次に、残りの項目を対象に主成分分析を行った。

1. 改訂セルフ・モニタリング尺度

項目水準での検討の結果、不適切な項目はなかった。改訂セルフ・モニタリング尺度は、もともと2側面から構成されると予測される (Lennox & Wolfe, 1984)。そこで、13項目を対象とする主成分分析（プロマックス回転〈 $k=3$ 〉）によって2主成分を求めた。2主成分での初期主成分固有値は1.00を上回った。この解の結果を Table 1 に示す。どの項目についても、①特定主成分の負荷量が十分に大きく ($\geq |.400|$)、②他主成分への負荷が小さい ($< |.400|$) という基準を充たしていた。負荷量のパターンは、Lennox & Wolfe の結果と一致しており、それぞれの主成分は、「他者の表出行動に対する敏感さ」、「自己呈示変容能力」と名づけた。回帰法によって主成分得点を算出し、以後の分析に用いた。

2. 恋愛態度・行動尺度

恋愛態度・行動尺度について、「過去」、「現在」、「未来」別に主成分分析（プロマックス回転〈 $k=3$ 〉）を行い、初期主成分固有値 ≥ 1.00 を満たす解をすべて求め、適切な主成分分解を探索した。今回の研究では、どの場合も2~7主成分分解が検討可能であった。その際、改訂セルフ・モニタリ

ング尺度の分析に用いた①と②の基準を設定した。この基準に一致しない項目を除き再度分析を行い、明確な負荷量パターンが得られるまで、このことを繰り返した。最終的には、回帰法によって主成分得点を算出し、これらの得点を後の分析で用いた。

①「過去」: 項目水準の検討によって、3項目が不適切であることが認められたので、残り23項目について主成分分析を行った。4主成分分解が解釈可能であり、最終的に、Table 2-a に示す明確な負荷量パターンを得た。当該主成分に負荷が高い項目を吟味し、それぞれ「排他的な関係」、「内面性の重視」、「適度な距離」、「他者への顕示」と命名した。

②「現在」: 5項目が項目水準で不適切な結果を示した。残り21項目を対象として主成分分解を求めた。ここでも4主成分分解が解釈可能であり、明確な負荷量パターンが現れた (Table 2-b)。主成分の出現順は異なるが、それぞれの主成分は「過去」の場合と同様な概念を表していた。それぞれ「排他的な関係」、「他者への顕示」、「内面性の重視」、「適度な距離」とした。

③「未来」: 項目水準での検討によって5項目が不適切であることが分かり、残りの21項目を対象とした分析の結果、4主成分分解が明確な負荷量パターンを示した (Table 2-c)。第Ⅰ主成分と第Ⅲ主成分は「過去」と「現在」の場合と同

Table 2-a 恋愛態度・行動〈過去〉尺度に関する主成分分析（プロマックス回転〈 $k=3$ 〉）の結果: 回転後の負荷量

	I	II	III	IV
〔排他的な関係〕				
pa_2_11 私は、恋愛関係にあったときには相手のことを四六時中考えていた。	.725	.056	-.097	.036
pa_2_5 私は、今まで恋人がいたら、他の異性には注意は向けなかった。	.684	-.173	.150	-.244
pa_1_11 私は、異性と交際していたときは、相手よりも自分の方が二人の関係を大切にしていた。	.654	.017	.069	.071
pa_1_6 私は、異性と付き合うときには、真剣な交際をしていた。	.567	.329	.187	.035
pa_2_14 私は、失恋したときには、極度に落ち込んだ。	.557	.103	-.257	-.025
pa_1_2 私は、恋人以外の人とはあまり親しくしていなかった。	.551	-.147	-.048	.123
pa_2_12 私は、恋愛関係にあるときには、その相手といつも一緒にいた。	.534	.190	-.350	.042
〔内面性の重視〕				
pa_2_7 私は、趣味が一致する異性と付き合ってきた。	-.178	.888	.100	-.050
pa_1_8 私が付き合っていた異性とは、性格が一致していた。	.084	.699	.024	-.016
pa_2_6 私は、人生観が完全に一致する異性に巡り会ったことがある。	.049	.674	-.098	-.008
pa_2_8 私は、今までの異性との付き合いでは、喜びを分かち合うことを大切にしてきた。	.292	.524	.126	-.079
pa_1_9 私は、今までに多くの異性と付き合った。	-.123	.474	-.391	.181
〔適度な距離〕				
pa_1_3 私は、今まで、恋人を束縛しなかった。	-.119	.062	.811	.111
pa_2_4 今までの私の恋愛関係では、ケンカはあまり起こらなかった。	-.057	.135	.694	-.109
pa_1_12 私の場合、異性との付き合いは急速になることは少なかった。	.129	-.083	.613	.251
〔他者への顕示〕				
pa_1_7 私は異性と付き合うときには、友達に自慢できるかが気になった。	-.028	.020	.038	.746
pa_2_2 私は、今まで異性と付き合う場合には、容姿を重視した。	-.024	-.053	-.160	.672
pa_2_9 私は、その異性の社会的能力を不満に思うときには、別れるようにした。	-.017	-.074	.173	.541
pa_2_10 私は、付き合っていた異性の内面が変化したときには別れた。	.223	.049	.170	.508
〔主成分間相関〕				
	I	.349	-.078	.019
	II		-.136	.047
	III			-.055
〔残余項目〕				
pa_1_1 私は、恋人とはあまり親密でなかった。				
pa_1_4 私は、性的な関係を特定の人に限定することはなかった。(a)				
pa_1_5 今までの私の異性との関係は、だいたい短期間であった。				
pa_1_10 私は、失恋した直後に新たに他の異性と付き合い始めたことがある。				
pa_2_1 私は、同時に複数の異性と性的関係をもったことがある。(a) (x)				
pa_2_3 私は、今までの異性との付き合いでは、内面を重視してきた。				
pa_2_13 私は、性経験が豊富な方である。(a)				

N=264

初期固有値 ≥ 1.574 ; 初期説明率49.14%(a): 平均値 < 1.5 ; (x): $SD < .600$

じ概念を表しており、それぞれ「排他的な関係」、「内面性の重視」と命名した。残りの2主成分は、「恋愛願望」、「外見性の重視」をそれぞれ示すと解釈した。

3. 恋愛態度・行動に関する2次主成分分析

恋愛態度や行動を「過去」、「現在」、および「未来」の3つの視点から評定させ、主成分分析を試みたところ、それぞれで4主成分が抽出された。各時間範囲で得られた主成

分はかなり類似していた。そこで、12個の主成分得点を対象とした2次主成分分析を行った。初期主成分固有値 ≥ 1.00 で4主成分解を求めると、Table 3に示すように明確な負荷量パターンが現れた。

負荷量の正負を考慮しながら、4主成分を次のように命名した。『排他的な関係』、『関係への没入』、『外見性の重視』、および『内面性の重視』。回帰法に基づき2次主成分

Table 2-b 恋愛態度・行動〈現在〉尺度に関する主成分分析（プロマックス回転〈 $k=3$ 〉）の結果: 回転後の負荷量

	I	II	III	IV
〔排他的な関係〕				
pr_2_11 私は、恋愛関係にあるときには、相手のことを四六時中考えるべきだと思う。	.764	.026	.144	-.079
pr_2_12 私は、恋愛関係にあるときには、その相手といつも一緒にいるようにすべきだと思う。	.763	.020	.113	-.095
pr_2_5 私は、恋人以外の異性に注意を向けるべきでないと思う。	.625	-.101	-.113	.173
pr_1_2 私は、恋人以外の異性とは、親しくしない方が良いと思う。	.593	-.129	.038	-.047
pr_1_11 私は、異性と付き合うときには、相手よりも自分の方が二人の関係を大切にすべきだと思う。	.445	.225	-.175	.328
〔他者への顕示〕				
pr_1_7 私は、異性と付き合うときには、友達に自慢できるかを気にすべきだと思う。	.211	.644	-.081	.307
pr_1_10 私は、失恋した直後でも、気が合う異性がいれば付き合うべきだと思う。	-.123	.599	.026	-.213
pr_2_2 私は、異性と付き合う場合には、容姿が決め手になっても良いと思う。	-.133	.592	-.041	-.136
pr_1_9 私は、多くの異性と付き合った方が良いと思う。	-.124	.575	.092	-.009
pr_2_13 私は、性経験が豊富な方が良いと思う。	.110	.492	.078	-.214
〔内面性の重視〕				
pr_2_7 私は、趣味が一致する異性と付き合うべきだと思う。	.000	.003	.818	.138
pr_1_8 私は、性格の一致する異性と付き合うべきだと思う。	.037	.045	.763	.086
pr_2_6 私は、人生観が完全に一致する異性に巡り会えるはずだと思う。	.224	-.052	.511	-.216
pr_2_9 私は、付き合っている異性の社会的能力に不満があるときには、別れるべきだと思う。	-.122	.145	.405	.352
〔適度な距離〕				
pr_1_12 私は、異性とは急速に親密になるべきでないと思う。	.039	-.219	-.049	.628
pr_1_1 私は、恋人とはあまり親密にならない方が良いと思う。	-.141	-.122	.173	.626
pr_2_4 私は、恋愛関係では、ケンカはあまりすべきでないと思う。	.276	-.065	.055	.494
pr_1_3 私は、恋人を束縛すべきでないと思う。	-.391	.045	.040	.490
〔主成分間相関〕				
	I	-.052	.090	-.073
	II		.070	-.004
	III			-.046
〔残余項目〕				
pr_1_4 私は、性的な関係は、特定の人に限定すべきだと思う。(b)				
pr_1_5 私は、異性とは、短期間の気軽な関係の方が良いと思う。				
pr_1_6 私は、異性とは真剣に付き合うべきだと思う。(b)				
pr_2_1 私は、同時に複数の異性と、性的関係をもつべきではないと思う。(b) (x)				
pr_2_3 私は、異性との付き合いでは、相手の内面を重視すべきだと思う。(b) (x)				
pr_2_8 私は、異性と付き合うときには、喜びを分かち合うことを大切にすべきだと思う。(c) (x)				
pr_2_10 私は、異性との別れは、相手の内面の変化によると思う。				
pr_2_14 私は、失恋したときに、極度に落ち込むことは仕方がないと思う。				

N=264

初期固有値 ≥ 1.382 ; 初期説明率44.81%(b)平均値 > 3.5 ; (c): 平均値 ≈ 3.5 ; (x): $SD < .600$

得点を求め、以下の分析で利用した。

恋愛態度・行動とセルフ・モニタリング傾向との関係

恋愛態度・行動とセルフ・モニタリング傾向との関係を探るために、セルフ・モニタリング傾向2主成分得点と以下の得点とのピアソン相関値を算出した。①3つの時間範囲で評定させた恋愛態度・行動で得られた各主成分得点、

②恋愛態度・行動に関する2次主成分分析での2次主成分得点。さらに、「他者の表出行動に対する敏感さ」主成分得点と「自己呈示変容能力」主成分得点との間に弱いが有意な正の相関関係が見られることを踏まえ ($r = .285$, $p = .001$), 他方を統制変数とする偏相関分析も行った。

1. 3つの時間範囲別の分析

3つの時間範囲別に求めた主成分得点とセルフ・モニタ

Table 2-c 恋愛態度・行動〈未来〉尺度に関する主成分分析（プロマックス回転〈 $k=3$ 〉）の結果: 回転後の負荷量

	I	II	III	IV
〔排他的な関係〕				
fu_2_11 私は、誰かと恋愛関係になったときには、その相手のことを四六時中考えるだろう。	.835	-.127	.014	.077
fu_2_12 私は、誰かと恋愛関係になったら、その相手といつも一緒にいるだろう。	.770	.068	.128	.012
fu_1_11 私は、恋人ができれば、相手よりも自分の方が二人の関係を大切にしよう。	.649	-.238	-.247	.077
fu_2_14 私は、失恋したら、極度に落ち込むだろう。	.586	-.046	-.021	-.046
fu_1_3 私は、恋人を束縛しないだろう。	-.566	-.152	-.035	-.021
〔恋愛願望〕				
fu_2_13 私は、これから先、豊富な性経験をもつだろう。	.107	.686	.028	.095
fu_1_9 私は、多くの異性と交際するだろう。	-.043	.685	.116	.171
fu_1_12 私は、異性と付き合う場合には、急速に親密になることはないだろう。	.059	-.657	.222	.300
fu_1_10 私は、失恋した直後に、気の合う異性が現れたらすぐに付き合い始めるだろう。	-.144	.613	-.011	.120
〔内面性の重視〕				
fu_2_7 私は、趣味が一致する異性と付き合うだろう。	-.026	-.021	.747	-.120
fu_1_8 私は、異性と付き合うときには、性格が一致しているかどうかが重要になるだろう。	-.028	.042	.696	.038
fu_2_10 私は、付き合っている異性の内面が変化したら、その異性とは別れるだろう。	-.080	-.082	.556	.155
fu_2_6 私は、人生観が完全に一致する異性に、この先巡り会えるだろう。	.285	.038	.515	-.120
〔外見性の重視〕				
fu_1_7 私は、異性と付き合うかどうかを決めるときには、友達の目が気になるだろう。	.139	.121	-.017	.765
fu_2_2 私は、異性との付き合いは、容姿によって決まるだろう。	.128	.290	-.085	.658
fu_1_5 私は、異性と付き合ったとしても、短期間で終わるだろう。	-.262	-.070	.070	.566
fu_1_1 私は、恋人ができてあまり親密にならないだろう。	-.363	-.221	-.052	.466
〔主成分間相関〕				
	I	.237	-.014	-.185
	II		.081	-.071
	III			.116
〔残余項目〕				
fu_1_2 私は、恋人ができれば、他の異性とはあまり親しくならないだろう。				
fu_1_4 私は、恋人ができれば、他の人と性的行為は絶対にしないだろう。(b)				
fu_1_6 私は、異性と付き合うときには、真剣になるだろう。(b) (x)				
fu_2_1 私は、同時に複数の異性と、性的関係をもつことがあるかもしれない。(a)				
fu_2_3 私は、その異性の内面を見て、付き合うかどうか決めるだろう。(c) (x)				
fu_2_4 私の場合、誰かと恋愛関係になっても、あまりケンカは起こらないだろう。				
fu_2_5 私は、恋人ができると、他の異性には注意を向けないだろう。				
fu_2_8 私は、異性と付き合う場合には、喜びを分かち合えることを大切にするだろう。(c) (x)				
fu_2_9 私は、付き合っている異性の社会的能力に不満をもったら、その異性とは別れるだろう。				

N=264

初期固有値 ≥ 1.462 ; 初期説明48.54%(a): 平均値 <1.5 ; (b)平均値 >3.5 ; (c)平均値 ≈ 3.5 ; (x): $SD < .600$

リング傾向2主成分得点との間のピアソン相関値と偏相関値を Table 4-a に示す。

「他者の表出行動に対する敏感さ」は、過去の「他者への顕示」、現在および未来の「内面性の重視」と有意な正の偏相関を示した。

他方、「自己呈示変容能力」は、過去の「内面性の重視」との間に有意な正の偏相関、現在の「適度な距離」との間

に有意な負の偏相関があった。また、未来では、「恋愛願望」と「内面性の重視」とで有意な正の偏相関、「外見性の重視」で有意な負の偏相関が得られた。

2. 2次主成分得点に基づく分析

恋愛態度・行動の2次主成分得点とセルフ・モニタリング傾向2主成分得点との間のピアソン相関値と偏相関値を Table 4-b に示す。

Table 3 恋愛態度・行動に関する2次主成分分析（プロマックス回転 〈 $k=3$ 〉）の結果: 回転後の負荷量

	I	II	III	IV
〔排他的な関係〕				
排他的な関係_現在	.874	-.044	.100	.008
排他的な関係_過去	.810	-.040	-.093	-.012
排他的な関係_未来	.796	.167	.027	-.053
〔関係への没入〕				
恋愛願望_未来	.002	.776	.271	.114
適度な距離_現在	.093	-.770	.318	.072
適度な距離_過去	-.154	-.649	-.078	.095
〔外見性の重視〕				
外見性の重視_未来	-.027	-.320	.799	-.096
他者への顕示_過去	.133	.016	.799	.125
他者への顕示_現在	-.134	.460	.743	-.044
〔内面性の重視〕				
内面性の重視_未来	-.048	-.155	.071	.899
内面性の重視_現在	-.043	.052	.013	.850
内面性の重視_過去	.197	.302	-.204	.451
〔主成分間相関〕				
I		.288	-.136	.090
II			-.037	.119
III				.130

N=264

初期固有値 ≥ 1.397 ; 初期説明率68.11%

Table 4-a 恋愛態度・行動とセルフ・モニタリング傾向との関係ーピアソン相関分析と偏相関分析ー

	他者の表出行動に対する敏感さ		自己呈示変容能力	
排他的な関係_過去	.035	〈.038〉	.005	〈.016〉
内面性の重視_過去	.091	〈.153 $p=.013$ 〉	.207 $p=.001$	〈.240 $p=.001$ 〉
適度な距離_過去	-.045	〈-.035〉	.037	〈.025〉
他者への顕示_過去	.182 $p=.003$	〈.186 $p=.002$ 〉	-.010	〈.043〉
排他的な関係_現在	.117 $p=.058$	〈.125 $p=.043$ 〉	.009	〈.045〉
他者への顕示_現在	-.031	〈.000〉	.109 $p=.076$	〈.105 $p=.089$ 〉
内面性の重視_現在	.129 $p=.036$	〈.154 $p=.012$ 〉	.068	〈.109 $p=.078$ 〉
適度な距離_現在	.112 $p=.069$	〈.079〉	-.126 $p=.041$	〈-.098〉
排他的な関係_未来	.090	〈.090〉	-.015	〈.011〉
恋愛願望_未来	-.022	〈.050〉	.244 $p=.001$	〈.248 $p=.001$ 〉
内面性の重視_未来	.228 $p=.001$	〈.271 $p=.001$ 〉	.130 $p=.034$	〈.198 $p=.001$ 〉
外見性の重視_未来	.091	〈.039〉	-.182 $p=.003$	〈-.163 $p=.008$ 〉

N=264

偏相関値 〈ピアソン相関値〉

偏相関分析: 他方のセルフ・モニタリング傾向主成分得点を統制

Table 4-b 恋愛態度・行動2次主成分得点とセルフ・モニタリング傾向との関係

	他者の表出行動に対する敏感さ		自己呈示変容能力	
排他的な関係	.118 $p=.056$	〈.121 $p=.049$ 〉	-.006	〈.029〉
関係への没入	-.062	〈-.005〉	.198 $p=.001$	〈.189 $p=.002$ 〉
外見性の重視	.113 $p=.068$	〈.104 $p=.091$ 〉	-.045	〈-.013〉
内面性の重視	.209 $p=.001$	〈.261 $p=.001$ 〉	.170 $p=.006$	〈.232 $p=.001$ 〉

N=264

偏相関値 〈ピアソン相関値〉

偏相関分析: 他方のセルフ・モニタリング傾向主成分得点を統制

「他者の表出行動に対する敏感さ」は、『内面性の重視』と有意な正の偏相関を示した。また、「自己呈示変容能力」は、『関係への没入』および『内面性の重視』との間に有意な正の偏相関を見せた。

IV. 考 察

本研究の目的は、Snyder (1979) が提起したセルフ・モニタリング概念の恋愛関係への適用可能性に関する検討であった。つまり、女子大学生を対象として、恋愛関係の枠組みにおける高 SM 者の①外見性重視傾向（仮説Ⅰ）と②排他的関係形成に対する消極的態度（仮説Ⅱ）の検証を試みた。その際、Lewin (1951) による時間的展望の観点も導入した。

この目的のために、Snyder (1986) による指摘に基づいて、恋愛態度や行動上の特徴に関する尺度を独自に作成した。「過去」、「現在」、「未来」に関してそれぞれ4主成分が得られた。これらの主成分は、2次主成分分析の結果を見ると (Table 3)、仮説Ⅰに関わる側面（『外見性の重視』、『内面性の重視』）と仮説Ⅱについての側面（『排他的な関係』、『関係への没入』）に分類できる。これらは、恋愛態度や行動上の特徴に「相手から入手できる情報の水準（外見性対内面性）」と「相手との関係の営み方」（排他性）の普遍的枠組みが評定基準の時間的範囲にかかわらず存在することを示唆している。

まず、恋愛態度や行動の2次主成分水準での分析結果 (Table 4-b) と本研究の仮説との対応を検討しよう。セルフ・モニタリング傾向の2側面ともに『内面性の重視』で有意な正の偏相関値を示し、仮説Ⅰと逆の結果が現れた。「自己呈示変容能力」と『関係への没入』との有意な正の偏相関値も仮説Ⅱと反対の結果である。また、時間範囲ごとに検討した偏相関分析 (Table 4-a) においても、認められた有意な偏相関値の方向は仮説ⅠやⅡに反していた。ただし、「他者の表出行動に対する敏感さ」と過去の「他者への顕示」主成分との有意な偏相関値のみが仮説Ⅰと一致していた。

本研究の仮説は、Snyder (1979) によって描かれた高 SM 者の分節化した日常世界の像に沿って設定された。しかしながら、前述したように先行研究ではこの Snyder の高 SM 者像と一致しない結果もあった（水野, 1991; 諸井, 2003; 新明・清板, 2005; 八城, 2007など）。今回の研究結果によると、恋愛関係の枠組みでは高 SM 者が相手の内面性を重視しながら、本来の恋愛関係の特徴でもある排他

的關係性（増田, 1994）に固執することが示された。

しかしながら、Snyder (1986) が実験的に示した高 SM 者の外見性重視傾向は、実は関係初期場面で得られたものである。水野 (1991) による写真選択の実験も同様である。確かに、高 SM 者は、相手の外見性が情報的には明確になりがちな初期場面ではそのような情報への注意を払うだろう。例えば、男子大学生に女性写真を呈示して交際相手の選択を求めた松井・山本 (1985) の研究でも、女性の美しさが選択の最有力な規定因であった。

しかしながら、自己開示を核として関係が親密化方向に変化し始めると、もともと視覚的に入手しやすい外見性よりも、自己開示によって入手できる相手の内面性の理解を重要視したほうが、相手との関係維持にとっては有益である。したがって、本研究のように、一般的な恋愛態度や行動傾向に焦点をあてると、結局のところ高 SM 者が外見性よりも内面性を重視する志向を見せるのは当然かもしれない。他方、状況やその変化をあまり気にしない低 SM 者は、重視するものを関係の進展に応じて外見性から内面性へと変化させることはなく、もともと本人がもつ志向性によっていると思われる。

高 SM 者が排他的関係の形成に消極的であるとする仮説Ⅱについても、相手の内面性が曖昧である関係初期段階と、自己開示の反復によって相手の内面性が明確になった段階を区別すべきであろう。前者の段階では相手に没入しないほうが得策であるが、後者の段階ではむしろ逆であるからである。吉川・飯塚・長崎 (2001) は、短期大学や大学に通う女子学生を対象として高 SM 者が関係開始や維持のスキルが高いことを見出している。また、八城・小口 (2003) は、Lennox & Wolfe (1984) や石原・水野 (1992) の研究で改訂尺度の「他者の表出行動に対する敏感さ」が高い者が自分自身の内面への注意も高い傾向を示していることから、他者の内面性情報入手への注目と自分自身の内面のモニターが同時に生起する可能性を推測している。これは、セルフ・モニタリング過程が、たとえば共感の働きも含むことを示唆する。共感に対する多次元的理解を試みた Davis (1994) は、以下の4側面を提起した。①視点取得〈自発的に他者の心理的立場をとる〉、②共感的配慮〈不幸な他者に対する同情や憐れみ感情を経験〉、③個人的苦痛〈他者の苦痛に反応して、当人も同様な経験〉、④想像性〈自分を架空の状況に想像上で移し込む〉。とりわけ、苦楽が生じる恋愛経験で高 SM 者が自己利益の最大化のために状況に即応した自己呈示を行うことができるかを、共感過程との関連も含めながら、吟味する必要

があるだろう。

このように、恋愛関係の枠組みで高 SM 者が形成する分節化した日常世界の検討を試みた本研究では、Snyder (1979, 1986) による考えに反する傾向が見出されたが、関係の進展段階という軸を挿入しながら、今後も検討すべきであろう。

ところで、Snyder (1974) はセルフ・モニタリング傾向を測定するための尺度を自ら開発した。しかし、本研究では、Snyder の原セルフ・モニタリング尺度の妥当性を批判し、新たに尺度を構成した Lennox & Wolfe (1984) の改訂セルフ・モニタリング尺度が用いられた。今回の研究でもこの尺度の因子的妥当性を確認した。

しかしながら、八城・小口 (2003) が指摘するように、米国に比べてわが国では Snyder による原版に基づいた研究のほうが多い。Lennox & Wolfe (1984) による改訂版の作成は、単に原版の洗練化というよりももとのセルフ・モニタリング概念の批判的吟味も含んでいる。つまり、実は、個人的傾性としてのセルフ・モニタリング傾向の測定を目的としながら、Snyder の原版と Lennox & Wolfe の改訂版が異なる構成概念を測っている可能性があるといえる。さらに、セルフ・モニタリング概念を文化比較の観点から吟味した守崎 (2000) によれば、他者に対する効果的な自己呈示が重要となる文化と他者との一致が重視される文化のもとでは、セルフ・モニタリングの意味や機能が異なる。セルフ・モニタリング概念の再吟味とその測定方法の妥当性の検討も今後重要といえよう。

今回の研究では、先行研究 (諸井, 2003) に続き、恋愛関係の枠組みの中でセルフ・モニタリング傾向がはたす役割に対する実証的検討を試みた。ところで、セルフ・モニタリング理論は消費行動にも拡大される。たとえば、Snyder (1986) によれば、高 SM 者が製品イメージを強調した広告に、低 SM 者が製品の質に重点をおく広告に影響されやすい。つまり、本研究でもともと仮説化した恋愛関係における高 SM 者の外見性重視傾向と一致する。わが国でも、橋本 (1997)、林・古池 (2004) や、池田 (2005) などがセルフ・モニタリング傾向と被服志向性との関連を検討して、高 SM 者が周囲の被服の流行を気にかけることを見出している。このように、高 SM 者が分節化した日常世界をどのように構成しているかを消費行動の側面でも検討する作業は重要であろう。被服行動も対人的文脈で生じるからである。

〈付記〉

- (1) 本研究で分析対象としたデータは、木村真由美さんと小松原愛さん (同志社女子大学・現代社会学部社会システム学科 2005 年度卒業生) が筆者の下で取り組んだ卒業研究のために収集した。ここで得られた成果は、卒業研究で彼女らが示した熱意の賜物である。
- (2) データの統計的解析にあたって、SPSS16.0.1J for Windows を利用した。
- (3) E-Mail: kmoroi@mail.dwc.doshisha.ac.jp

V. 引用文献

- Davis, M.H. 1994 *Empathy: A social psychological approach*. Westview Press. (菊池章夫訳 『共感の社会心理学—人間関係の基礎—』 1999 川島書店)
- 藤岡 徹・高橋知音 2008 レノックス&ウォルフ版改訂版セルフモニタリング尺度の改訂 信州大学教育学部紀要, 120, 71-79.
- 橋本 宰 1997 セルフ・モニタリングおよび自尊感情と被服行動の関係 文化學年報 (同志社大学文化学会), 46, 13-22.
- 林 文俊・古池由里子 2004 女子大学生の被服行動とセルフモニタリングならびにユニークネス欲求との関連について 文化情報学部紀要 (相山女学園大学), 4, 47-55.
- 堀毛一也 1987 自己モニタリングの概念および尺度に関する検討 東北福祉大学紀要, 11, 185-199.
- 池田善英 2005 セルフ・モニタリングが被服行動に及ぼす効果 東京成徳短期大学紀要, 38, 11-15.
- 石原俊一・水野邦夫 1992 改訂セルフ・モニタリング尺度の検討 心理学研究, 63, 47-50.
- 岩淵千明・田中国夫・中里浩明 1982 セルフ・モニタリング尺度に関する研究 心理学研究, 53, 54-57.
- Lennox, R.D., & Wolfe, R.N. 1984 Revision of the Self-Monitoring Scale. *Journal of Personality*, 46, 1349-1364.
- Lewin, K. 1951 *Field theory in social science*. Harper & Brothers. (猪股佐登留訳 『社会科学における場の理論』 1956 誠信書房)
- 増田匡裕 1994 恋愛関係における排他性の研究 実験社会心理学研究, 34, 164-182.
- 松井 豊・山本真理子 1985 異性交際の対象選択に及ぼす外見的印象と自己評価の影響 社会心理学研究, 1, 9-14.

- 水野邦夫 1991 女子大学生におけるデート対象の選択傾向—セルフ・モニタリングとの関連— 同志社心理（同志社大学文学部心理学研究室）, 38, 11-17.
- 水野邦夫・橋本 幸 1993 対人関係の形成におけるセルフ・モニタリング諸特性の特徴について—友人・恋愛関係をもとに— 同志社心理（同志社大学文学部心理学研究室）, 40, 17-26.
- 守崎誠一 2000 セルフ・モニタリングに対する文化の影響—セルフ・モニタリング理論再考— 国際関係研究（日本大学国際関係学部国際関係研究所）, 21, 177-196.
- 諸井克英 1995 『孤独感に関する社会心理学的研究—原因帰属および対処方略との関係を中心として—』 風間書房
- 諸井克英 1997 セルフ・モニタリングと対人不安との関係におよぼす認知欲求の効果—女子青年の場合— 人文論集（静岡大学人文学部社会学科・言語文化学科研究報告）, 48(1), 31-71.
- 諸井克英 2003 若者の対人環境管理に関する社会心理学的研究(5): 恋愛の進展におよぼすセルフ・モニタリング傾向の影響 同志社女子大学学術研究年報, 54, 299-318.
- 新明夕貴子・清板芳子 2005 セルフ・モニタリング傾向が友人選択や友人関係に及ぼす影響 児童臨床研究所年報（ノートルダム清心女子大学児童臨床研究所）, 18, 28-46.
- Snyder, M. 1974 Self-monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 30, 526-537.
- Snyder, M. 1979 Self-monitoring processes. *Advanced in Experimental Social Psychology*, 12, 85-128.
- Snyder, M. 1986 *Public appearances private realities: The psychology of self-monitoring*. New York: W.H. Freeman and Company. (齊籐 勇監訳 『カメレオン人間の性格—セルフ・モニタリングの心理学—』 1998 川島書店)
- 遠矢幸子 2003 友人関係の親密性コントロールに関わるストラテジー—セルフモニタリング傾向との関連について— 香蘭女子短期大学研究紀要, 46, 201-206.
- 八城 薫 2007 セルフ・モニタリング傾向が携帯電話利用および生活充実感に及ぼす影響 人間関係学研究（大妻女子大学人間関係学部）, 9, 187-197.
- 八城 薫・小口孝司 2003 セルフ・モニタリングの両義性について—他の心理学的個人差との関わりから— 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 6, 27-35.
- 吉川洋子・飯塚雄一・長崎雅子 2001 女子学生の社会的スキルと自尊感情およびセルフ・モニタリングとの関連 島根県立看護短期大学紀要, 6, 97-103.